

〈研究会報告〉

開発教育を考える

生地 陽*

6月2日の例会で、「開発教育を考える」と題して発表させていただきました。開発教育は、南の国の低開発の問題とその背景を学び、その解決への積極的な態度の育成をめざすという当初のねらいから、最近ではグローバルな問題として南北問題を共有し、先進国の人間の生き方を再考したり、南の国の文化や価値の理解へとその内容と目的に広がりをもせている分野である。しかし、学校現場での知名度は依然として低い状態にある。このような新しい教育のテーマがとりだたされて、いろいろな議論がおこり、次第に学校現場に浸透して行く、そのようなプロセスは、教育界で、過去に何回も繰り返されてきたことと思うが、開発教育や国際理解教育は、まさに、その中にある。私の発表で主張したかったことは、そのような浸透のプロセスで、どのようなことをすべきか、ということである。発表の中で紹介した実践は、土曜日の放課後にインドシナ難民として日本に定住している高校生を学校に招き、希望した生徒、教職員と交流するものであった。参加した人数もけって多くなく、また県内の国際理解教育推進校でも既に実践されていることがわかった。しかし、その意義は、今後、開発教育、国際理解教育を現場で進めるためのきっかけ作りであったと思っている。

先日も、ある高校の先生から電話をいただき、同様の企画を開きたいのだけれども、職員の合意が得られないという悩みを打ち明けられた。開発教育という名前も、開発教育が扱っているような内容も現場では、依然なじみがないのであって、そのような中で、突然企画が持ち上がってきても、学校内に戸惑いがうまれるのはやむを得ない。日頃から、教職員、生徒、保護者、地域の人々に理解を求めるための活動を積み上げていかねばならない現状がある。交流会の企画さえ困難なのであれば、もう一度、その企画のあり方を反省してみるとともに、教職員が見学会を開いたり、もっとやわらかく、エスニック料理を食べる会的なものを開いたりしながら、少しずつ理解を深め、その段階を経て、実践の場への導入を考えることが必要なかもしれない。なぜそこまでしなければならないかということ、意識を持つ教職員が理解されないために個人的な実践の殻に閉じ込められ、よい実践や問題意識が普及しないことを心配するからである。私も、勤務校が変わり、さっそく社会科の先生方と大和定住促進センターの見学とカンボジア料理を体験する巡検を行ったり、県の国際教育研究協議会への参加を検討したりして。

*神奈川県立霧が丘高等学校